

16次研究のまとめ

北海道特別活動研究会 研究部

1. 研究主題、めざす児童・生徒像、大会課題

< 研究主題 >

主体的によりよい生活や活動をつくりあげ、
望ましい人間関係を築く力を高める特別活動

< 児童・生徒像 >

よりよい生活や活動づくりに進んで参画し、互いに信頼し高め
合う関係をつくりあげる子

< 大会課題 >

函館・渡島大会

活動づくりに進んで取り組み、仲間と積極的に関わり合う児童・生徒を求めて

釧路大会

自己の役割を自覚しながら活動づくりに取り組み、仲間を共感的に理解し関わり合う児童・生
徒を求めて

胆振・室蘭大会

自他のよさを生かしながらよりよい活動づくりに取り組み、仲間を信頼し共に高め合う児童・
生徒を求めて

2. 研究の視点に関わって

視点1

よりよい生活や活動づくりへの実践力を高める活動の在り方

< 胆振・室蘭大会 各分科会の提言より >

- ・子どもたちがやりたいと思える活動を設定する。
- ・教師と生徒が互いにイメージでき、達成目標とできるような学級目標に決める。
- ・委員会活動で当番的な活動から、まずは、工夫できるものを一つ入れていく。
- ・各行事における目標や中・短期的な計画を教師間での共通理解し、子どもへ関わる。
- ・校内の諸活動や地域との活動を通して、見通し主体的に動く姿勢を育てる。

一人一人が活動の目的をもつ

子どもたちの実践力を高めていくためには、一人一人が役割意識をもっていないてはいけません。そのためには、活動の目的を理解することたが大切です。子どもたちは、話し合い活動において、具体的な内容を話し合っていく中で活動の目的を共通理解していきます。そうすることで、自分は何をすべきかを考え、主体的に取り組む姿につながっていきます。

折り合いを付けながら集団決定する

16次研究の3年間、話し合い活動の三つの段階を意識した学級会が行われていました。「出し合う」は、様々な考えを発表する段階。「くらべ合う」は、多様な意見を分類・整理しながら、よりよい取り組み方を探っていく段階。「まとめる」は、話し合いを収束し学級の総意を決めていく段階です。

また、話し合う内容と発達段階に応じた集団決定の方法を事前に学級内で共通理解しておくことで、自分の意見をどのようにして説明したらよいのか、互いに見通しをもって話し合い、集団決定に向けた話し合い活動が展開されやすくなります。

さらに、「私は～」「さんは～」「私たちは～」と主語を意識した話し合いをしていくことで、集団活動に向けた合意形成が図られやすくなります。

< 集団決定の方法（例） >

	出し合う 「私は～」	くらべ合う 「さんは～」	まとめる 「私たちは～」
全学年・低学年 < 賛成意見の多いものに決定 > どれに決まってもよい内容	A、B、Cの3つ程度の案を出す。 原案が出される場合は、省略	賛成意見を出し、よりよい案に2つ程度に絞り込む。	さらに賛成意見を出し、賛成する意見の多いものに決定。
中学年 < 新しい案を出して決定 > どちらも納得する中間の意見を出す	A、B、Cの3つ程度の案を出す。 原案が出される場合は、省略	賛成意見を出し、2つ程度の意見に絞り込む。 反対意見を出し、問題点を明らかにする。	2つの意見の両方が納得する中間の意見が出たら決定。
高学年～中学校 < 少数の意見を考慮して決定 > 多数の意見に条件を付けた内容	A、B、Cの3つ程度の案を出す。 原案が出される場合は、省略	賛成意見を出し、1つに絞り込んでいく。 反対意見を出し、問題点を明らかにする。	少数意見（問題点）が解決する条件（方法）が見つかったら決定する。

自分のよさを生かし
ながら取り組む

個々が実践力を高めていくためには、「具体的な目標をもつこと」とそれを実現するために「役割意識をもって取り組むこと」が必要です。話し合い活動において、自分たちで話し合い、納得のいく内容で集団決定をする。みんなで問題解決のための方法を話し合い、それをもとに自己決定する。そうすることで、これから自分は何をどうするとよいのか、自分にできることや自分だからできること（自分のよさ）を考え、見通しをもって主体的に活動する子どもの姿につながっていきます。

成就感、期待感が膨
らむ

取組の中では、自分はどのように活動したか、自分の取り組み方のどこがよく、どこを工夫していくとよいのかを発達段階に応じながら、自分の行いを客観的にとらえていく手立てが大切です。そうすることにより、子どもは自分のよさに自信をもち、次の活動に対してそのよさを生かして主体的に取り組もうとします。このような営みの積み重ねにより、個々が成就感を高め、次の活動に期待感をもって取り組んでいく子を育てていきます。それが個々の実践力を高めていくことにつながっていきます。

視点 2

集団活動の魅力を実感し、人間関係を形成する力を高める活動の在り方

< 胆振・室蘭大会 各分科会の提言より >

- ・学級集団内の全員が同じ土台や条件で活動し、思いや願いを共有できる環境づくり。
- ・互いの個性を尊重して役割分担し、意味のある活動・喜びをもって取り組める活動を展開。
- ・異年齢交流の充実のために、小中高のような縦の連携、地域との交流活動も設定。
- ・行事での異年齢交流は、他者理解を深めることができる。
- ・実践として積み上げていくための特別活動における P D C A の工夫。

集団活動の魅力を実
感する

集団活動の魅力とは、「自分一人ではできないけれど、みんなとだからできたこと」とおさえます。そのためには、「楽しさ」を実感し、「困難を乗り越える」ことのよさを味わい、集団構成員の「よさを生かし合い」ながら、問題を解決していくという流れがポイントとなってきます。

よさを生かし合う集団にするためには、受容的な風土を醸成していく必要があります。「 さんには、 な面もあるけれど、 なよさがある」という相互理解と「 さんには、 な面も含めて さんだ」という全面的に認め合う人間関係をつくっていかなくてはなりません。これは、教師の大きな役割のひとつであり、日常生活の中で、積極的に教師が子どもたちへ語り、子どもたちと共に様々な実践を通してそのような人間関係をつくっていかなくてはなりません。

他者を尊重し、集団
決定していく

集団決定を尊重していくことはとても大切です。学級会における話合いの三つの段階に応じて、子どもたちの思いのずれを整理し、子どもたちが自身でそれを埋めていくことができるように教師が関わっていきます。そのような関わりを通して、子どもたちは集団決定を尊重し、実践しながら相手を思いやる気持ちを育てていきます。

また、教師は子どもたちが互いのよさが分かり、自分たちの成長を自覚できるように価値付けをしていきます。そうすることにより、子どもたちは自己肯定感を高め、仲間を共感的に理解し、より人間関係が深まっていきます。

所属意識を高める自
己評価、相互評価

行事を含めて学校での取組の多くは異年齢での活動になります。子どもたちが成長を実感し、個々が自己有用感を得るためには、評価が重要になります。取り組んだ内容に対して、発達段階を踏まえながら自己評価、相互評価の仕方を工夫して自己有用感を存分に味わわせ、所属意識を高めていくことで活動の質をさらに高めます。

PDCA の一連の取組
を積み重ねる

学級活動だけでなく生徒会活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事などにおいても、自分たちで計画、実践、振り返り、改善などの一連の活動が大切です。振り返る場において自分たちでよりよい活動をすることができたという満足感を味わい、それを積み重ねていくことで次の活動へ向けた意欲が高まるだけでなく、実践活動に向けた必要な知識、技能を身に付け、人間関係を形成する力を高めていきます。

4. 17 次研究に向けて

16 次研究のまとめの年である胆振大会の大会課題を「自他のよさを生かしながら」「仲間と信頼し共に高め合う」をキーワードとして多くの授業実践、分科会提言がなされました。

・自他のよさを生かす

自分にはどのようなよさがあるのか、自分の取り組み方に自信をもち、互いにそれを集団の強みとして生かし合っていく姿です。誰もが自己肯定感をもち、よりよい生活や活動づくりに進んで取り組んでいく姿を求めていきます。

また、自己や集団の目標に向けた営みの繰り返しによって、個々がより意志をもって活動する、「参画する」子どもの姿があるのだと明らかになりました。自分や自分たちの取り組みはどのような成果があるのか、それを個々が具体的に語れるようにしなくてはなりません。そのためには、効果的な自己評価、相互評価の機会を教師が意図的に設ける必要があります。

・仲間を信頼し、共に高め合う

仲間を信頼するためには、互いの営みを共感的に理解していることが必要です。明確な自己決定や集団決定をすることにより、個々が自分のよさを生かして取り組み、その営みを繰り返し、互いの努力を自覚し合うことで、次の活動でも仲間を信頼しようとする態度を高めていきます。しかし、時にはよりよいものを求めて、解決しなくてはならない困難もあります。解決に向けて真摯に話し合い、集団の目標をより明確にすることにより、集団活動の魅力が高まり、共に高め合っていくのだと

ということも明らかになりました。そのような一連の活動により、子どもたちは単なるなれ合いの関係ではなく、よりよいものを目指して高め合う、「望ましい人間関係づくり」につながっていくのです。そのためには、どの子ども悩みながらも、知恵を出し合って決定する話し合いはどうあるべきなのかを考えていかななくてはなりません。

また、16次研究では特別活動にかかる時間とその具体的な成果について、多くの話題が提供されました。望ましい集団活動を通して、個々の人間関係を築く力を高める、自主的・実践的な態度を育むという特別活動の基本的な目標をこれからも求めていかななくてはなりません。さらに、学級、学校生活が充実することで、子どもたちの学び進めていく態度を育て、学力の向上にもつながっていくと考えます。来年度からの17次研究では、以下の2点に重点をおきながら研究し、具体的な成果と特別活動の充実を求めていきます。

自分や自分たちの成長を感じる

目標に向かって粘り強く取り組み続けるためには、自分の取り組み方が自分たちの生活をよりよくしている、自分や自分たちはこの取組を通して成長しているといったことを実感することが大切です。16次研究において、PDCAの一連の取組が、個々や集団の自信を高めていくことにつながるといふ提言が多く発表されました。

17次研究においても、PDCAの一連の取組を大切に、子どもたちがより高みを求めていく活動を目指します。しかし、振り返りや改善のための話し合いは、活動をよりよくしていったり、学びを積み上げていったりするために行われるものです。子どもたちの活動(D)の時間を保証するために、PCAに多くの時間が割かれないようにする指導計画の工夫が必要です。

互いに知恵を出し合う活動づくり

話し合い活動における「出し合う」「くらべ合う」「まとめる」の3つの段階と集団決定の方法を共通理解することは、誰もが話し合いの流れが分かり、誰もが司会を進めることができるためにとっても重要です。16次研究では、多くの公開授業、分科会提言にて「授業時間内に決める」「折り合いを付けながら、結論を出す」実践が発表されました。しかし、1時間の中で集団決定をすることを優先させすぎてしまい、形式的になったり、妥協する話し合いになってしまったりする懸念があります。それでは、集団の一員として一人一人が自分たちの目標に向かって、協力したり、協働したりすることができません。

そこで、17次研究では、1時間で集団決定することを前提としながらも、互いに知恵を出し合って問題を解決していく話し合い活動を目指します。話し合いの3つの段階を踏まえながらも、教師が適切に子どもたちの問題を焦点化したり、整理したりしながら、子どもたちがよりよい解決へ向けて、誰もが納得できる話し合い活動を探っていきます。